

いろいろな彩色が施されていたことが明らかにになりました。調査結果に基づき記念事業として五年近くの期間をかけて阿弥陀堂の彩色を一部復元します。

御影堂の瓦葺き替え

永観堂で一番大きな堂宇である御影堂（大殿）は、大正元年に

竣工した総檜造りの建物で、宗祖法然上人をお祀りしています。永観堂では最も新しい建物ですが築九十年余を経過し、近年雨漏りなどが発生しており屋根瓦の補修が必要となっています。今回、八百回大遠忌の記念事業の一つとして、御影堂の屋根瓦の総葺き替えを行います。平成十九年十一月以降に着工します。



常林院年中行事予定

一月二日 修正会（初参り）
三月九日 涅槃会、会計報告
三月二十日 春彼岸会（予定）
四月八日 花祭り
八月一〜十四日 棚経
八月五〜七日 墓回向
八月十六日 お施餓鬼
八月下旬 地藏盆
九月二十三日 秋彼岸会（予定）
十一月十四日 お十夜会

本山永観堂年中行事予定

二月十四〜十五日 念仏行道会
四月二十二〜二十五日 御忌会
八月一〜三日 緑蔭法話
十一月上旬 紅葉ライトアップ
寺宝展開幕
十一月九日 西山上人降誕会

あとがき

昨年は大変お世話になりました。本年もどうぞよろしくお願ひ致します。さて、年末の清水寺において、恒例の一年をあらわす漢字は「偽」でした。去年の一連の事件を思い起こすと、なるほどと思えます。「偽」という漢字は、「んべん」に「為」と書きます。「人の為」と書いて「偽」という皮肉な漢字です。去年の「偽」のつく事件は、どれも人の為ならず自分の私利私欲の為から起きたものばかりです。今年は、「人の為」となる良いニュースが少しでも増えることを願います。

今年も皆様にとって良い一年となりますよう御祈念いたします。

合掌

平成二十年一月十五日発行

浄土宗 西山禅林寺派

常林院

月影



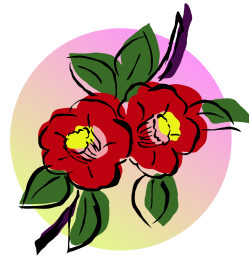
第 21 号

てき うら こと
敵を恨むる事なかれ、

ひとえ
これ偏に先世の
しゆくごう

宿業なり

うるまのときくに
漆間時国（法然上人の父）の遺言
〔行状絵図〕第二



法然上人の父は漆間時国うるまのときくにといい、押領使おしりょうしという役人でした。押領使とは、現在でいう警察署長のような仕事です。その仕事から、人から逆恨みさかうらをされることもしばしばあったようです。
法然上人が九才の時、夜討ちに遭い、父時国は瀕死の重傷を負い、ほどなく臨終の床につきます。
時国は息を引き取るときに、九才の法然上人を枕元に呼びよせ、

「このようになったのも、我が身の巡り合わせであるか

ら、敵を恨んではいけない。たとえ仇を討ったとしても、その次はおまえが恨まれ、遺恨が繰り返されるだろう。どうか出家して、我が菩提を祈り、仏の道を歩んでおくれ・・・。」

と言つて、息をひきとりました。

法然上人は、父の言葉にしたがつて出家し、仏教の世界へ入っていかれました。法然上人が生涯「父の遺言忘れがたく」と言つておられたように、父の言葉は上人を『武士から僧侶へ』と人生を大きく変え、上人の生き方にも深く影響を及ぼしました。また、家の跡継ぎだった上人が出家することで家は断絶。母も、父にしたがつていた家来たちも、その生活の上に大きな変化をもたらしませんでした。

時国の遺言は「敵を恨むな」の一語につきます。

しかし、もし実際に自分の家族の命が奪われることがあったとしたら、はたして恨まずにいられるでしょうか・・・。その一方、世界で起こるテロや戦争のように、恨みが繰り返されている悲しい現実を耳にすると、時国の「敵を恨むな」の言葉がよぎります。

お釈迦様は「怨みに報いるに恨みをもってしたならば、怨みのやむことはない。怨みをすててこそやむ。これは永遠の真理である。」と言つておられます。

お経の話

〜何が書いてあるの?〜

浄土宗西山勤行式 (赤本) 解説

香偈

願我身浄如香炉 願我心如智慧火

念念焚烧戒定香 供养十方三世仏

(読み下し文)

願わくは我が身浄きこと香炉の如く。

願わくは我が心智慧の火の如く。

念念に戒定の香を焚きまつりて。

十法三世の仏に供养したてまつる。

(現代語意訳)

きよらかな香炉で香が香るように、わが身もきよらかでありませうに。

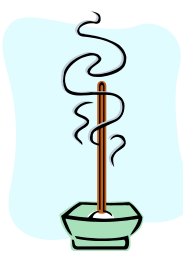
灯明の火が暗闇を開くように、わが心も仏さまの智慧の光で迷いの闇を開けますように。

身を戒め、心静かにとの思いをこめて香をおたきし、現在・過去・未来のいつ、いかなるところにもおられます仏様におささげいたします。

浄土宗西山勤行式は、我が宗派の基本となる経本です。赤い色をした経本なので、通称、赤本と呼ばれています。月参りや、法事などもこの赤本を基本として読経します。

赤本をめくると、一番初めに出てくるのが香偈です。香偈は、中国の僧、善導大師の詩句の一節です。香偈の「偈」とは、梵語のガーター(伽陀)で、「歌」のことです。善導大師の阿弥陀仏に対する信仰の思いが、歌となって表されています。

「清浄せずに仏を礼し、お経を読んでも功德なし。」というように、昔から、おつとめを始める時は、香をたいて清めるということを非常に重んじてきました。香をたく時は、すべてのけがれを焼きつくして身も心もきよらかなることを願って香をたきます。あたり一面によい香りがたちこめ、清らかな香りにふれて、私たちの清らかな心も引き出されてきます。そして、香炉が、香のために浄らかであるように、私たちの身も浄らかでありたい。香炉の火が香をたいて浄らかな香りを放つように、私たちの心も智慧の火をもって、浄らかにしたい、という願いを込めて読経します。



あれこれ仏教用語

往生（おうじょう）

「往生する」といえば、どうしようもなく困り果てること、また、あきらめておとなしくなること、死ぬことなどの意味があります。

また「往生がわるい」といえば、どたん場にのぞんで、なかなかあきらめがつかないことに使われます。

浄土宗では、臨終の時、正しい信仰をもって死に臨むことの大切さが教えられるので、往生がわるいという言葉が生まれたようです。

もとは極楽浄土に生まれることを往生といいます。

極楽往生、往生安楽など。



仏事と作法

問） 葬儀に友引を避けるのはなぜですか？

答）

これは、語呂合わせの迷信で、仏教とは何の関係もありません。

「友を引く」と読めることから「誰かを道連れにする」との迷信が生まれ、この日に葬式を営むことが避けられるようになり、火葬場も休むようになりました。（大阪など一部地域は休みではありません）
このように、根拠のない迷信が信じられるようになり、普段の日常生活で、当たり前前の習慣となっていることは、けっこうたくさんあります。

永観堂だより

阿弥陀堂の彩色復元

永観堂の本堂、阿弥陀堂（京都府指定文化財）は慶長二年に大阪・

まんだらどう

四天王寺の曼荼羅堂として建てられ、十年後の慶長十二年に永観堂に移築されました。移築当時には、阿弥陀堂の荘厳として極楽浄土を思わせる彩色が堂の内外全体に施されていたといわれます。

平成十八年初頭の調査により、内陣の柱の上部から「ぬし やぎ ゆう 慶長十二年」と判読できる墨書が発見されました。また堂内

の鴨居には、かんもつこうはなくるす 鍛木瓜花久留子・

きりたけくるすもん

切竹久留子文と呼ばれる十字架をモチーフにした幾何学模様がかかれており、塗装の状態からこの模様は曼荼羅時代の装飾と考えられます。他にも牡丹唐草模様、瑞鳥、龍や唐草、亀甲文など、